

Institute for Language Education
Aichi University, Nagoya

Goken News

No. 11 July 2004



自転車と一緒に電車に乗ろう！：
フランス・オルレアン市の路面電車内部。左下、改札機の右に
自転車を固定する金具が2セットある。「海外最新事情」参照。

CONTENTS

- ・映画『殺人の追憶』にみられる韓国映画
の新たな段階
（丸谷雄一郎） 2
- ・「冬ソナ」と韓国大衆文化開放
（藤森 猛） 3
- ・Estuary English 近頃の若い者の英語
（安藤 聡） 5
- ・時代の奔流に抗して
（竹中 克英） 7
- ・政教分離の再確認を！
（河原誠三郎） 10
- 海外最新事情 14
 - ・イギリス
 - ・アメリカ
 - ・フランス
- 外国語コンテスト 17
 - ・英語部門
 - ・ドイツ語部門
 - ・フランス語部門
 - ・中国語部門
 - ・韓国・朝鮮語部門
 - ・日本語部門
- 外国語コンテスト入賞作 20
 - ・英語部門
 - ・日本語部門

映画『殺人の追憶』にみられる韓国映画の新たな段階

経営学部
丸谷雄一郎



主演の2人(左がソン・ガンホ、右がキム・サンギョン)。

『殺人の追憶』は全国上映中。

公式ホームページは (<http://www.cqn.co.jp/mom/>)。

この写真は(有)シネカノンより提供いただきました。

『殺人の追憶』は2003年の韓国興業収入第1位を記録し、大鐘賞(韓国アカデミー賞)の作品賞、監督賞、主演男優賞、照明賞を受賞し、東京国際映画祭、トリノ映画祭など多くの国際映画祭でも評価された。監督は団地の小犬連続失踪事件を題材にしたコメディ『ほえる犬は噛まない』で昨年話題となったボン・ジュノであり、主演はJSAで独特の存在感を示した韓国を代表する俳優ソン・ガンホと新鋭キム・サンギョンである。

映画は1986年ソウル近郊の農村で若い女性の裸死体が発見されるシーンから始まる。彼女は無惨にも手足を拘束のうえ強姦されており、同じ手口の殺人事件が繰り返される。現地には特別捜査本部が設置され、地元の刑事パク・トゥマン(ソン・ガンホ)とソウル市警から派遣されたソ・テユン(キム・サンギョン)がこの難事件に挑む。パク刑事はたたき上げであり、拷問もいとわぬ伝統的捜査を行ない、ソ・テユンは4年制大学を卒業した都会派であり、捜査資料を重視する近代的捜査を行なう。二人は当初対立しあうが、失敗を重ねながら互いを認め合うようになり、ついに有力容疑者ヒョンギュに行きつく。しかし、二人は証拠不十分でヒョンギュを拘束できず、決定的証拠であるDNA鑑定の結果を待つ間に、ソ刑事が捜査中知り合った女学生が殺される。ソ刑事は理性を失いヒョンギュを撃ち殺そうとするが、その時DNA鑑定の結果がパク刑事によって届けられる。しかし、その結果は予想に反したものであった。

時が流れ、刑事を辞めたパクがファーストシーンで出てくる殺人現場を偶然訪れるが、彼のやり切れない表情がこの事件の全てを物語る。

現在、韓流がアジアを席卷しつつあり、日本でも「シュリ」の大ヒット以降、「JSA」「猟奇的な彼女」などの一部の映画がシネマコンプレックスにおいて全国規模で公開され、単館上映を含めれば、韓国映画が常に数本は上映されている状況になっている。そして、「冬のソナタ」のヒットが韓国ドラマブームを引き起こし、韓国ドラマを扱った多くの書籍が出版され、過去のヒットドラマがBS、CS、地方局を中心に放映されている。その多くはクオリティが高く、非常に楽しめるが、ハリウッド映画や日本のトレンドドラマのエッセンスを韓国風にアレンジした「よくできた複製品」との感じを否めなかった。

この作品は「迷宮入りした連続殺人」という消化しづらいテーマを逆手に取り独自の解釈をすることによって、民主化への過渡期という当時の時代背景や翻弄される捜査官の葛藤を、ユーモアを含めながら描き、結論がでないもどかしさをメッセージとして訴えかけている。

当時の韓国は独裁政権が終わり、民主化の嵐が吹き荒れていた。私は大学院時代多くの韓国人の留学生に囲まれ(一時期日本人の私と10人前後の韓国人という構成になったこともある)、学生運

動や軍隊における経験などを聞く機会を得た。この映画は彼らから聞いた当時の時代の雰囲気と見事に符合しており、そのリアルさにおいて他の韓国映画を圧倒している。多くの韓国映画やドラマはテーマの1つとして朝鮮戦争やベトナム戦争への従軍による別れを直接的に描いているし、兵役はラブストーリーでも必須の題材となっている。しかし、そこで描かれる描写は何か薄っぺらさを感じ、この映画の間接的でありながら、リアルさを示した描写とはかけ離れている。この相違はこの映画の表現力の強さを反映しているといえる。

この映画のハードな側面ばかり述べてきたが、この映画の多くのシーンは韓国の一般的な田舎の雰囲気やそこにあふれるユーモアの描写に割かれている。その象徴がファーストシーンとラストシーンで描写される畑のど真ん中の殺害現場である。この殺害現場のシーンはこの映画が都会の一部の地域において起こりえたことではなく、多様な面で過渡期であった当時の韓国社会のどこにでも起こりえた事件であることを納得させる。そして、こうした描写が非現実である連続猟奇殺人の恐怖感を際立たせ、犯罪に対する嫌悪感や現場捜査官の葛藤に対する観客の共感を与えているのである。

この映画はテーマがテーマだけに見ていて楽しさばかりを感じられる作品ではない。しかし、多くの日本映画が陥っている「説教くささ」だけが残る作品ではなく、エンターテインメント作品として十分に成立している。韓国映画は「シュリ」「JSA」などを経て国際的に通用するエンターテインメント性を十分に身に付けており、そうした段階を経たからこそ実現可能であった作品であり、私はこうした映画が興行収入1位となる韓国の映画産業をうらやましく感じる。私も昨年日本で興行収入1位となった「踊る大捜査線」は大好きな作品であるが、韓国と日本の映画産業のレベルの差と観客のスタンスの違いに愕然とした。

現在、「冬のソナタ」がNHK地上波で放映され大ヒットしているが、「冬のソナタ」で関心を持った皆さんもぜひこの作品を見てほしい。新たな段階に達した韓国エンターテインメント産業の

現状が垣間見られるはずである。

「冬ソナ」と韓国大衆文化開放

現代中国学部

藤森 猛

韓国の大衆文化開放

1998年10月のキム・テジュン(김대중)大統領によって始められた第一次「日本文化の開放」が2004年には第四次開放の段階に至り、日本の映画・ビデオ・出版・歌謡曲・アニメーション・演劇などの大衆芸術文化が次々と韓国において一般公開されることになった。同時に韓国からも映画・歌謡曲・テレビドラマなどの多くの作品が日本に流入し、日本をはじめ中国・台湾・東南アジアなど多くの地域で「韓流」と呼ばれる韓国の大衆文化の一大ブームが起こっている。

まず映画においては、93年『風の丘を越えて』(서편제)の公開に始まり、『八月のクリスマス』(8월의 크리스마스)、『シュリ』(쉬리)、『接続』(접속)、『JSA』、『友へ チング』(친구)、『春香伝』(춘향전)などの作品の公開で、韓国映画作品の大ヒットが続いている。言うまでもなく、2002年の日韓W杯(ワールドカップ)開催が日本における韓国ブームに火をつける契機となっている。

一方、ドラマにおいては、日本における2003年からの『冬のソナタ』(겨울연가)のNHK放映が契機となり、熱狂的な韓国ブームが引き起こされ、2004年4月、主演男優のペ・ヨンジュン(배

윤준)の来日による“ヨンさま”ブームが社会現象とまでなっている。

「冬ソナ」現象

テレビドラマ『冬のソナタ』は、高校時代の初恋物語が、主人公の男性の事故死によって終わり、それが10年ほど経った後に再びそっくりの容貌を持った男性が現われて恋愛が再開するという設定でドラマが進んでいく。主演のペ・ヨンジュンとヒロインのチェ・ジウ(최지우)が、出会いの場となったチュンチョン(춘천)やソウルのロケ地が観光スポットとなり、韓国国内をはじめ日本・中国などの“冬ソナ”ファンが押し寄せている。

『冬のソナタ』がブームを引き起こした要因は、様々な視点から意見が述べられている。まずドラマの中で過去・現在・未来の恋愛の姿が描かれる中で、60年代から70年代の日本のテレビドラマや映画に描かれたほのぼのとした純愛ドラマが描かれている。これに加え、ドラマの舞台となった高校の古ぼけた放送室の建物、あるいは主人公の二人が初めてデートをした木立や雪原といった韓国の美しい自然が物語のイメージを高めている。

次に物語では、主人公の度重なる事故や死、偶然の出会いなどが繰り返され、日本のドラマでは考えられない急展開のストーリーとなっている。これは韓国のドラマが現在量産体制にあり、激的なドラマの視聴率競争にあることが一因といわれる。一本あたりのドラマ制作の時間に制限のある中で、キャストには高度な演技力が求められ、またシナリオは視聴者受けするドラマ展開が求められ、“ぶっつけ本番”で撮影現場においてシナリオが修正されることも多いといわれる。韓国では通常の日本のドラマ制作にみられるように、長期のロケ期間・制作期間において、複数のシナリオの中から俳優の演技やセリフを取捨選択して決定する方法が必ずしもとられていない。こうして、ドラマが視聴者にとっては、“はらはら、ドキドキ”の連続となり、画面に惹きつけられる一因となっている。

「冬ソナ」と「キャンディ」

テレビドラマ『冬のソナタ』がヒットしたもう一つの大きな要因は、物語におけるキャラクターの構成にあるといわれる。登場人物のうち、ペ・ヨンジュンとチェ・ジウが純愛ドラマを形づくりの中で、視聴者は一方で、助演男優のパク・ヨンハ(박용하)の暖かな愛情に支えられ、一方で助演女優のパク・ソルミ(박솔미)の“継子いじめ”的な攻撃にさらされる。この“善悪の両天秤”の中で主人公の恋愛がドラマチックに展開する。非常にわかり易い登場人物の設定は、最近の日本のテレビドラマでは見られなくなっている。

『冬のソナタ』を熱狂的に支持したのは、韓国においても日本においても30~40才代の女性であるといわれている。日韓における30~40才の世代は、60~80年代の少年・少女時代にアニメーションを多く見て育った世代である。韓国においては、日本の大衆文化が開放される前の時代である60年代~80年代にかけて、例外的に日本のアニメーションが放映され、『鉄腕アトム』(우주소년아톰)、『黄金バット』(황금박쥐)、『マジンガーZ』(마징가Z)などの科学・SFアニメをはじめ、多くの日本アニメが韓国のテレビで放映されてきた。特に70年代~80年代の少女アニメ『キャンディキャンディ』(캔디캔디)はコミック本としてもテレビアニメとしても韓国の少女たちの圧倒的な支持を得たことは、日本の状況と共通している。

『冬のソナタ』で悪女役を演じたパク・ソルミの“チェリン”役は、まさに『キャンディキャンディ』の中の悪女“イライザ”役のキャラクターであり、徹底して主人公の女性チェ・ジウをいじめ抜いている。このことが多くの女性心理を主人公への共感へ結びつけるものになっている。

かつて中国をはじめアジアで空前の大ヒットを記録した中国歌劇・映画『白毛女』、日本映画『君よ憤怒の河を渉れ』(中国名『追捕』)、日本ドラマ『おしん』(中国名『阿信』)や山口百恵の一連のテレビドラマなどは、すべて主人公の女性が貧しい境遇に設定されている。また同時に常に主人公を追いやる悪役がいることもこれら

の作品には共通している。『冬のソナタ』のヒットはそのようなストーリー展開をドラマに求める東アジアの人々の心理が反映されているともいえる。(本文執筆にあたっては李周遠さんの協力を得ました。)

Estuary English 近頃の若い者の英語

経営学部
安藤 聡

「河口英語」(Estuary English)とは英国の言語学者デイヴィッド・ロウズウォーンの造語であり、主にイングランド南東部の中産階級の若者が話す英語を指して言う。ロンドンからテムズ河口にかけての地域で最初に聞かれたことからこのように命名された。しかしながらロウズウォーンがこの新語を発表したのは1984年のことであり、初期河口英語世代は既に五十代に突入している。最近ではテムズ流域に限らずかなり広い範囲で若年層を中心に河口英語が話されるようになっていて、また中産階級ばかりでなく例えば上院議員の中にもこの種の英語を話す者がいる。「クイーンズ・イングリッシュ」を体現するはずのエリザベス女王の発音にさえ、河口英語の影響が認められるようになって来たという(御園 2004)。このような英語が発生した背景には、ロンドンから郊外へ移住する人口が増加し、ロンドン方言とケント州やサリー州あたりの RP (もともとこれらの地域には RP 話者が多かった) が混合したことがあ

る。

河口英語の特徴はおよそ以下の通りである。

(1) 語尾や音節尾の子音 'l' が 'w' の音になる：

例えば 'fall' は「フォール」というよりも「フォーウ」に近くなり、'milk' は「ミウク」と聞こえる。但し 'light' や 'lord' などの語頭の 'l' は普通に 'l' として発音される。これは標準英語 (Received Pronunciation. 以下 RP) における「曖昧エル」(dark 'l') がより曖昧化したために 'w' のように聞こえるということである。語頭の 'l' は「明瞭エル」(clear 'l') なので決して曖昧化しない。

(2) 語尾や音節尾の子音 't' が声門閉鎖音 (glottal stop) 化する：

声門閉鎖音になるということつまり、実際には音を発しないということであり、'it' は「イッ」、'out' は「アウッ」、'butter' は「バッター」と発音される。ロンドンの南にある空港 Gatwick は河口英語では「ガツウィック」、'フットボール' は「フッポーウ」になる。この傾向は特に若年層に顕著であり、このような発音は伝統や体制といったものに対する無意識の反逆とも考えられている (Coggle 1993)。'twenty' を「トウエニー」と発音するのは米語的な印象があるが、河口英語でもそう発音される。

(3) 語頭の 't' はより強く息を吐き出して発音される：

RP はアメリカ標準発音 (GA) と比べてもすべての 't' 音を強く発音する傾向があるが、河口英語では語中や語尾の 't' が発音されない一方で、語頭の 't' はいっそう強く発音される。そのため 'take' は「チェイク」、'tell' は「ツェウ」と聞こえる。

(4) 長母音 [i:] が二重母音のようになる：

例えば 'me' が「ミー」ではなく「メイ」に近くなり、また(3)の特徴と相まって 'tea' が「ツァイ」と発音される。

(5) 子音の後の 'y' 音が脱落する：

「ニュース」(正しくは「ニューズ」)の語頭の子音 'n' の後には 'y' の子音がある。発音記号ではこの音は [j] で表されるが、この [j] 音を脱落さ

せると「ニューズ」は「ヌーズ」になる。これは河口英語だけでなく米語にも見られる特徴だが、河口英語で特に顕著である。例えば 'student' は RP では「ステューデント」だが河口英語では「ストゥーデント」、マグロ (tuna) は RP なら「チューナー」、河口英語なら「トゥーナー」になる。日本語の「ツナ」はおそらくアメリカ合衆国からの外来語であろう。「ヌード」(nude) も同様であり、「正しい」英語では「ニユード」である。一方で 'l' と 's' の後の [j] 音は RP でも脱落することが多く、'absolute', 'suitable' は RP, 河口英語双方において「アブソルート」、「スータブル」と発音される。これらを「アブソリュート」、「スュータブル」と発音すると非常に保守的な印象を聞く人に与える。また、「d」の後の [j] 音は脱落するのではなく 'd' の子音そのものに干渉し、'duty' や 'dual' はそれぞれ RP では「デューティー」、「デュアル」だが河口英語では「ジューティー」、「ジューアウ」に近くなる。但し 'Did you ~', 'Won't you ~' は本来なら「ディッデュー」、「ウォウンチュー」だが、これらについては RP でも「ディッジャー」、「ウォウンチュー」が許容される。

(6) 'st' が 'sht' に近い音になる：

先ほど 'student' は河口英語では「ストゥーデント」だと言ったが、この特徴を加味すれば「シュトゥーデント」と表記するべきだったかも知れない。河口英語ではこのように、「strike」が「シュトライク」、「instruction」が「インシュトラクショ」聞こえる。

(7) 特定の語彙に米語的発音が用いられる：

一例を挙げれば 'either', 'neither' は英語では「アイザー」、「ナイザー」だが、河口英語では米語と同様「イーザー」、「ニーザー」と発音される。

これらの発音上の特徴に加えて、河口英語にはその特有の言い回しがある。例えば 'Thank you' や 'Good-bye' の意味での 'Cheers', 'Hello' の代わりに 'Hi', あるいは人にものを渡すときの 'Here you are' が 'There you go' になる、といった特徴である。私が2002年夏と2003年夏に数週間ずつ滞在したオクスフォードの宿の小母さんは、

朝食を持って来るときにいつも 'There you go' と言っていた。オクスフォードはテムズ河口からかなり距離があるが、このように現在ではかなり広い範囲で、かなり広い年齢層が河口英語を話しているのである。レディング大学の複数の言語学者による研究では、ロンドンの北約80キロにある人工都市ミルトン・キーンズの1990年代初頭の若者の発音に既に、河口英語の特徴の多くが顕著に認められたという (Maidment 1994)。

多くの研究者が既に指摘しているように、河口英語の若者たちの間での急速な普及には、RP が象徴する伝統主義、保守主義への反逆という側面がある。上層中産階級以上の保守的な年輩者たちは河口英語という「近頃の若い者の英語」に眉をひそめ、伝統的な「美しい」英語が損なわれて行く現状を憂慮して一頃は新聞の投書欄を随分と賑わせた。年輩の RP 話者にとって河口英語は、米語と同じくらい「耳障りな」英語らしい。一方で地方の若者たちにとっては、河口英語は「都会的な」、「洗練された」英語に聞こえるため、それなりに魅力のあるものだという。また下層中産階級や労働者階級の若者たちにとっては、河口英語は自分の「家柄を隠す」ための「都合のよい」英語でもある。ロウズウォーンは1994年の論文で河口英語を「英語の均一化への初めての試み」と評価して、将来的に河口英語が「標準語」化する可能性を暗示している。しかしながら、辞書の発音記号通りの発音という意味では「模範的な」RP が河口英語に淘汰された場合、私たち日本人のように「外国語としての英語」を学ぶ者たちにとって、英国の英語はもはやその規範としての価値や魅力を失うかも知れない。

参考文献

- 木村和夫 'Some Aspects of Estuary English' 『文学論叢』第118号 (愛知大学文学会, 1999), pp. 190-202.
- 御園和夫 「英語の母音変化 エリザベス女王の30年」 『シルフェ』第43号 (シルフェ会, 2004), pp. 18-23.

Cogle, Paul, *Do You Speak Estuary?* (Bloomsbury, 1993).

Levey, David and Tony Harris, 'Accommodating Estuary English', *English Today* 71 (Cambridge University Press, 2002), pp. 17-20.

Maidment, J. A., 'Estuary English: Hybrid or Hype?', [Http://www.essex.ac.uk/speech/teaching-01/474/maidment.html](http://www.essex.ac.uk/speech/teaching-01/474/maidment.html)

Rosewarne, David, 'Estuary English: tomorrow's RP?', *English Today* 37 (Cambridge University Press, 1984), pp. 3-8.

-----, 'Pronouncing Estuary English', *English Today* 40 (Cambridge University Press, 1994), pp. 3-8.

(『文学論叢』と *English Today* のバックナンバーは大学の図書館にあります)



時代の奔流に抗して

法学部
竹中 克英

アメリカ大統領ブッシュの顔をたびたびテレビで見、その演説を聴く。すると、なぜかとたんに不快感に襲われる。かつて1960年代のアメリカ映画で先住民をまるで射的的的のように撃ち殺していた開拓時代のならず者たちを思い出す。品性も教養も感じ取ることができないのだ、残念ながら。

わたしたち地球人は、確固たる安定した大地に不動の姿勢で立っている、と錯覚している。だが、事実はそのようなことはない。大地はすさまじい速度で回転しつつ、宇宙空間を巨大な楕円を描いて駆け巡っている。そして、わたしたちはまるでジェットコースターの乗客のようにこの「不動」の大地に乗り込んでいる。この構図を実感するには、地球外宇宙空間のどこかに視点をすえて、地球を観察すればいい。「それでも地球は動いている」とガリレオがつぶやいてから数世紀。わたしたちの踏みしめる足下の大地は決して不動ではないのだ。この物理的速度の脅威を実感できないのは、わたしたちが自分と同じように地球上の一切の物体が同じ速度で移動していることに起因する錯覚にとらわれているからにすぎない。

フランツ・カフカは「木々」と題する小品で次のように記している。

「なぜならぼくたちは雪のなかの木の幹のようなものだから。それは滑らかに雪の上に載っ

ているように見える，ほんの一突きで押しつけることもできるだろう。いや，そうはいかない，木の幹は大地とかたく結びついているのだから。しかし，見たまえ，それすらもそう見えるというにすぎない。」

時代という運動体もまた同じである。この奔流の中に身をおくかぎり，その速度を計ることはできない。18年という歳月を隔てて，昨年1年ドイツの地でふたたび生活し，時代がこの社会を運び去っていったその猛烈な速度を実感せずにはいられなかった。1986年から2004年の18年は世界の急激な変貌を感じさせるのに十分すぎるほどの長さだ。1989年の東欧社会主義体制の崩壊とともに，資本主義はヨーロッパをさながら巨大なブルドーザのごとく荒々しく地ならししていった。アルフレート・デープリングが長編小説の舞台とした「ベルリン・アレクサンダ広場」に立って，周囲を見回してみればいい。そこはもうドイツでもなければ，ヨーロッパでさえない。感じられるのはただ個性をなくした巨大都市空間と資本主義的繁栄の虚像のみ。ミュンヘンの市役所庁舎の前に群れ集う人々の背後には，カールシュタット，C & Aなどの百貨店群の建物。名古屋の栄の町並みと変わらない。観光客はそんなところに見るべき文化がないことをよく知っている。彼らの視線はただ一点，市庁舎の巨大な建物の時計塔に注がれている。

世界が，あのとき，時代のジェットコースターに乗り遅れまいと必死で乗り込み，一様に変貌を遂げた。わたし自身がこよなく愛するチェコの首都プラハの変化もすさまじかった。二枚の写真がある。いずれもプラハの街中で写したもののだが，この18年の時代の変化を写真は歴然と物語っている。この街で20世紀の初頭を生きたカフカをわたしは18年前に写した写真のほうにいつそう強く感じる。社会主義はこの街を無残にも荒廃させたかもしれない。しかし，社会主義は他方で一切の変化を，変貌を遮断し，かつてカフカが生きた時代

のプラハをそのまま残した，とも言える。そのカフカの生家は，悲しいことに，レストラン・カフカとなっている。詩人たちが集い，プラハの文化の中心でもあったカフェ・アルコも跡形もなく消えていた。18年前，街をあちこち歩き回り，偶然たどり着いたカフェ・アルコで飲んだ苦いコーヒーの味もそのときの感動も，もう二度と体験することはできない。当然なのだ。時代は社会や町を，そして人間さえをも激しく変貌させ，二度と同じ場所に連れ戻すことはないのだから。



わたし自身もその間に日本という社会において急速な変貌を遂げたはずなのだが、日本といういわばヨーロッパにとっての地球外宇宙空間に立って、18年前と今日のこの世界の時代的距離を計測してみると、ドイツが想像できないほどの変貌を遂げたことがわかる。ドイツだけではない。世界がすさまじい速度で走り去る時代のジェットコースターに運ばれているのだ。しかし、わたしたちはだれもこの狂気を語ろうとしない。

あなたの住む町や村にマクドナルドとケンタッキー・フライドチキンがありますか？もしなければ、マック度0。残念ながら時代の流れから取り残されているのです。マックとケンタッキー、それがなければ話になりません。北京でさえもう10年以上も前にケンタッキー号店が開店しています。それらは自由と民主主義、ついでに資本主義の象徴ですよ。ただし、アメリカ式の。ただし、あのジョージ・ブッシュ式の。そういえば、2年前に訪れた北京の王府井ももう北京でも中国でもなかった。

ドイツでドイツらしい生活を、と考えて日本を発った。時間さえあればあちこち見境もなく駆け回って、お、ドイツはすごい、へえ、これが世界史に出てきた城なんだ、などと以前のように旅行者気分を時を過ごすのではなく、静かに1年を過ごしたかった。粗末な自室の机に向かって読書に時間を費やし、近くの森の中を時々散歩し、日本ですっかり擦り切れてしまっていた精神を癒すために、時代の流れからはずれて、真性の時の流れを感じたいと思った。半ばこの願いは実現し、だからここで求められたまっとうな体験談など何ひとつ書けない生活ができた。恩師ヴァルター・ファルク教授の亡き後、つましく静かに暮らす夫人をマールブルクに訪ねたときだけが救いだった。ただここだけで18年前のドイツの生活を感じることができた。街から数キロ隔てた郊外の山の中の教授宅もその周囲の小さな村も、時代を離れて静かにつつましくそこにあった。



(ファルク教授宅)

そしてもうひとつ思い出した。プラハ中心街でとまった宿は受付の少女の話では15世紀の建物だという。そういえば、4階の部屋まで重いトランクを苦勞して引き上げた狭い回り階段の途中の2階に、まるで中世の牢獄を思わせる鉄格子の扉が嵌っていて、出入りするたびに鍵を開け閉めしなければならなかった。だが、不思議なことに、この宿での3晩は妙に落ち着いて眠ることができた。

時代を批判し、文化を語ろうとするときの危険は、そのつもりがなくとも、主張がロマン主義的(いや、保守反動的というべきか)傾向を帯びる点にある。かつて「近代の超克」を唱え、日本ファシズムの精神的支柱となった一派だけでなく、そもそもロマン主義運動そのものが鋭い時代批判性を備えながら、反時代的・反歴史的傾向を強めざるを得なかった。しかし、果たしてそうなのか？時代が誤る、ということをおわたしたちは近代史においてさえたびたび経験してきたのではなかったか？問題は、時代に内包されているさまざまな意味可能性をわれわれがつかみ得ないまま、まるでひとつの可能性しかありえないかのように「錯覚」しているだけではないのか？

テロリストに対するアメリカの正義の戦いに加担しない国はテロリスト国家とみなす、とブッシュはイラク戦争を開始する前に世界を威嚇した。フセイン打倒後の今日の混迷のイラク状況を目の当

たりにして、イラク国民の抵抗運動をなおもテロリスト呼ばわりするブッシュへの不快感がますます募る。彼にとっては正義も平和も、だから自由も民主主義もひとつしかありえないのだ。アメリカ式正義、いやブッシュ式正義、ブッシュ式平和、ブッシュ式自由、ブッシュ式民主主義だけしか。そして、それらを支えるブッシュ式資本主義の不気味にわたしは戦慄せざるを得ない。

この時代とは別の姿をした時代、この社会とは別の姿をした社会に静かに生きてみたい。それがドイツへ出かける1年前のわたしの願いだったし、いまの願いでもある。時代からはずれることができないのなら、せめてこの時代の趨勢に加担しないで生きることが。

カフカと第一次世界大戦の関係を追及することがドイツ滞在の研究テーマだった。そのカフカは戦争のただ中であって、生涯でもっとも創造的で生産的な時期を過ごした。彼が戦争について直接発言することはほとんどなかったし、戦争を文学的に形象化することもしなかった。1914年9月13日、その彼が日記に記している。「戦争と結びついている考えは、それらが実にさまざまな方面で僕を苦しめる点で、F フェリーチェ のために生じたかつての憂慮に似ている。」戦争はこの直前に、そして彼が長編小説『審判』を書き始めた直後に勃発した。なぜ彼は戦争を書かなかったのか。彼にとって戦争は直接的な殺戮・戦闘の問題ではなく、時代に対する人間の基本的姿勢と倫理の問題にほかならなかつたからだ。この倫理的問題を究明し、カフカと戦争の関係を明らかにしたのが、恩師ヴァルター・ファルク教授だった。

わたしたちはいまほど時代との関わりを倫理的課題として取り組むことを余儀なくされているときははないような気がする。

“ 政教分離の再確認を！ ”

法学部
河原誠三郎

物の生産手段が限られ生きることが困難だった大昔、不幸を見かねて色々な宗教が生まれたのだが、言葉とわずかな施ししか救いの手段がなく、したがって、どの宗教も現世の生を諦めて、あの世の幸せを求めよ、とその幸せの確たる証拠も示し得ないまま説教せざるを得ず、人はなお欠乏のまま放置された。

神などという荒唐無稽な観念を編み出した宗教家たちは、現世を諦めよと説きながら、他方大びらに現世を享受してきている。その欺瞞の大きさはヨーロッパの教会の壮麗さ、儀式の華やかさに示されている。京都などの寺社数の多さと土地建物の壮大さには驚愕する。宗教家たちは王侯貴族の生活を夢見、その優雅な生活の永続を願っているのである。そして、世俗の勢力と組んで、自己の勢力を広げることだけに専心してきている。宗教争い、宗派争い、勢力拡大争いは今だに続いている。

人間がある知恵に達するには、長い時間と経験が、とりわけ失敗の経験が必要だ。大多数の人間が無知無学だった頃できあがった古い古い教典になお頼って、神は全能であると言いつつ、だが神の救いは恣意的である、救いたいと神が思えば救われる、熱心な信者であっても全てが救われるわけでない、などと神の無能力を自ら認めたような逃げ道を作っている宗教、そのようなものに人々の運命を預けるわけにはいかないだろう。「王権神授説」などを唱えて自己と家族との繁栄と永続

だけを願う王侯貴族にも、多数を占める国民の幸福を委ねることはできないだろう。

一般大衆はこう考え、歴史も18世紀になって初めて、不幸の原因がどこにあったかが理解できた。国民は自らの手で自らの幸福を作り出さなければならぬことに気づいたのである。1789年のフランス革命時の『人権宣言』の前文には、「人権に対する無知と忘却と軽蔑とが、国民大衆の不幸と政府腐敗の唯一の原因である」と書かれている。その第1条は、「人間は生まれながらにして自由であり、法において平等である」、とある。第10条は「誰であれ、たとえ宗教上の意見であっても、その意見表明で脅されることがあってはならない」と規定している。政治権力を手に入れた今、世迷い事を言っていたがらみだけの宗教から国民を、そして政治を引き離すことが必要である。

だが、人々の心に伝統のごとく根付き、町中に、丘の上に堂々たる店構えを残してきて、それゆえに権威のごとく威嚇する宗教は、その後も政治と共にしたたかに生き続ける。元手の一切かからない言葉で不幸をなだめられたお返しに寄進を求められたうえ、約束のあの世の幸福の空手形だけが与えられる時代が続くのである。フランスでは20世紀の初めになって、ようやく政教分離の原則が確立される。『国家と教会との分離に関する1905年12月9日の法律』の第1条で信仰の自由を保障すると同時に、第2条で、次の年の初めから共和国はいかなる宗教行事にも国費を出さないことを決める。1958年制定の現在の第5共和国憲法第1条は、「出自、民族あるいは宗教の区別なく法の前での平等を保障する」と同時に、「フランスは政教分離の共和国である」と規定している。第2条に掲げる国是：自由、平等、友愛の価値はこの原則によって高められるのである。

ところで、昨年来、フランス国内で大きな論争が巻き起こっている。この原則の具体的適用が、様々な新しい大きな困難に直面しているのである。特に公共サービスの分野、学校や病院である。

困難に直面して、共和国大統領シラクはスタジ委員会に問題点を諮問した。その報告書によれば、

政教分離とは、共和国協約（憲法）の要石であり、3つの分かちがたい価値に基づいている。すなわち、1) 信教の自由、2) 精神・宗教上の選択の法における平等、3) 政治権力の中立性である。信教の自由は市民に精神・宗教上の生活を選ぶことを許す。法における平等はあらゆる差別や強制を禁ずるものであり、そして国家はいかなる選択にも特権を与えない。さらに、国家はその権力に限界があることを認めて、精神・宗教の分野へのあらゆる干渉を差し控える、というものである。

報告を受け、シラクは2003年12月17日の演説で、公立の小中高校では、どの宗教に属しているかをあからさまに示す標章や服装の着用をはっきり禁止したい、と表明した。

周知のとおり、フランスは昔ゴールと呼ばれ、ケルト人の国だった。そこに古代ローマ人が戦勝者として入り、後の民族大移動に際してはゲルマン人が進入して843年に国家として成立した後も、南からイタリア人の移民を多数受け入れてきた。いわば他民族の混生国家である。さらには、近代の植民地政策の破綻の結果、旧植民地からの移民には寛容にならざるを得なかった。それゆえ、様々な宗教に属する人々が入ってきた。人々は近年、国内に宗教コミュニティを作り上げ、独自の社会をつくり、自己顕示をおこない始めたのである。生徒は、大きな宗教行事を口実に学校を欠席する。教師さえ宗教色の濃い服装で教壇に立ち始めた。これをやめさせようと訴訟も提起されたが、原告敗訴が続出、判決も限界を示し得ないままである。教育現場は混乱している。

なぜ、特に学校なのか。今年2月3日国民議会（衆議院に当たる）に対し提案理由を説明した首相の演説から引用してみよう。

「フランスの伝統とは開放の伝統である。キリスト教徒の古い国、フランスは様々な文化との接触によって豊かになってきたし、世界の至る所からやってきて今日子孫をもうけた特に女や男の人たちを介して、国家への統合という成り行きの中で、今なお豊かになりつつある。統合とは相互の意志が前提となるプロセスのことである。それは

価値観へ向かう動きであり、生き方の選択、フランスに固有の、ある種の世界観への同意である」

「この法案の趣旨は、共和国の法律を超えたところに共同体への帰属意識を置きたいと願っている人々への回答である...国家は信仰の自由の擁護者ではあるが、熱心な教義勧誘、宗教共同体への帰属、さらには男女平等の否定などによって共和国協約の中心をなす基本的自由が脅かされる場合には、介入せざるを得ない」

「今日、宗教上の標章特にイスラムのベールが学校で増加していることは確かである。それが政治的意味を持っており、宗教所属の個人的標章であると見なすことがもはやできない状態である」

「学校とは共和国の中立の場所である。そうでなければならないところだ。なぜならそこはとりわけ精神形成の場であり、知識伝達の場、未成年者の市民としての修行の場、教義の勧誘とは両立しがたい諸観念を伝達する場だからだ」

「共和国の価値観は、生まれがどうであれ、フランスの子供達に共有されてきた。この伝統の中で、共和国をいつも使命のごとくに生きている先生達のおかげで、どれほど多くの移民の子供達が同化されてきたことであろう。証言してもらうに優れた人には事欠かない。その人達のためにも我々の持つこの価値の力、共和国の政教分離のこの力を改めて確認しなければならない」

首相の演説を受けて立法院は動いた。今年3月3日成立した『公立小中高校における政教分離の原則に関する法律』によれば、あからさまな ostensible サインと服装とは、その着用がどの宗教を信じているかを直ちに *immédiatement* 判らせるものであって、その標章の具体物とは、イスラムのベール（スカーフ）、ユダヤ教のキッパ（お椀帽）、見た目にも大きな十字架である。ただし、控えめの印すなわちファチマの手、ダビデの星、十字架は当然容認される。

首相の下には政教分離監視所が設けられ、法律は今年の第一学期（10月からクリスマスまで）から適用されはじめる。猶予期間中に、各学校は周知説明をおこない、校則を改めなければならない。

法律違反は、他の生徒義務違反同様、罰則の対象になる。懲戒手続きを定める諸原則にあわせて、罰則は違反の軽重による。

翻って、我が国の事情をみてみよう。憲法20条第1項後段に「いかなる宗教団体も、国から特権を受け、又は政治上の権力を行使してはならない。」とある。また、その第3項は「国及びその機関は、宗教教育その他いかなる宗教的活動もしてはならない。」と規定している。第89条は「公金その他の公の財産は、宗教上の組織若しくは団体の使用、便宜若しくは維持のため、又は公の支配に属しない慈善、教育若しくは博愛の事業に対し、これを支出し、又はその利用に供してはならない。」として、国の財産の支出利用に制限を加えている。

このような憲法の規定があるにもかかわらず、昭和46年の名古屋高裁判決による津地鎮祭憲法違反判決は、52年の最高裁判決で不当な理由で退けられ、また、大阪地裁における箕面市忠魂碑慰霊祭判決に見るように89条違反判決も、また上告審で敗訴している。平成になってからは、3年の岩手靖国訴訟控訴審判決による天皇、内閣総理大臣の靖国神社公式参拝は違憲、玉ぐし料等の奉納も宗教活動を援助するものと認められるから政教分離の原則に違反しているとの判決や4年の大阪高裁判決、また、松山地裁の1年の玉ぐし訴訟違憲判決があるが、政府はこれらの判決を無視し、明らかに宗教的と思われる活動に肩入れしている。またまた今年4月7日福岡地裁において、首相の靖国参拝は、首相が秘書官を随行し、公用車を使い、内閣総理大臣と記帳し、官房長官に談話を発表させたという理由で首相の職務執行のひとつであったとして、憲法で禁じられている「宗教的活動」であり、違憲との判決が出た。控訴がなくこの判決は確定したが、それにもかかわらず、小泉首相は、今後も「参拝します」と明言している。自民党幹事長は「地裁段階では、そんな判決もよく出るものだ」と、高をくくっている。政府のお声がかかりで選ばれる裁判官が多数を占める最高裁があるから、大丈夫だと言わんばかりである。「判決を気にせずに、今後も参拝を続けてほしい」

などとも述べて違反行為を勧めている。もっとも、地裁段階でもたとえば2、3月の大阪、松山地裁判決にみるように、憲法判断を示さずに原告請求を退ける裁判官がよくいるのである。これなどは「憲法の番人」である資格を自ら放棄したもので、出世主義者の裁判官だと思われる。このような人々がいずれは上告審の裁判官に選ばれるのであろう。

日本は法治国家のはずである。憲法によって選ばれた首相が憲法を無視し違反する行為を繰り返してよいはずがない。99条によって憲法を守るのは公務員の義務であるが、真っ先に違反をするようでは、首相の資格はないのである。

(海外最新事情)

イギリス

植えてはいけない帰化植物

チェルシー・フラワー・ショウが今年も開催される。(この『語研ニュース』が出る頃にはすでに過去形になっているが。)これはロンドンの高級住宅街チェルシーにある病院の敷地内で毎年5月下旬に、王立園芸協会(Royal Horticultural Society)の主催で行われるもので、すでに140年を越える歴史があり、例年15万人以上の園芸愛好家が世界中から集う。

RHSの200周年に当たる今年のフラワー・ショウでは、その会場となる巨大パヴィリオン正面に、異例の「警告文」が掲示されるという。それは特に英国内の庭師や愛好家に向けた「植えてはいけない」植物を列挙したものである。ここに挙げられているのは外国産の繁殖力の強い植物であり、その強すぎる繁殖力の故に英国原産の植物を淘汰し、英国の生態系を破壊しかねないと危惧されている。例えば北アフリカからユーラシア大陸にかけて分布するオドリコソウ(dead nettle)や北アフリカの地中海沿岸のニオイカントウ(winter heliotrope)、南アフリカのヒメヒオオギスイセン(montbretia)などである。ダーウィンは『種の起源』(1859)の中で、島国原産の動植物よりも大陸原産の動植物の方が「強い」ことを指摘しているが、ここでリストアップされている植物の多くも大陸原産のものである。一つだけ、19世紀中頃に日本から入って行ったニワヤナギ(knotweed)が含まれているが、これはすでにイングランド南西部(特にコーンウォール州)に繁殖していて、イングランドの他の地域やウェイルズにも広がりつつあるという。この問題について

はすでに、コーンウォール・ノットウィード・フォーラムという会が結集され議論されている。

これらの帰化植物が繁殖した背景には「インスタント・ガーデン」の普及がある。このリストに挙がっている植物の多くは、手軽に短期間で庭を完成できるとして、園芸店などで盛んに販売されたものである。生育が早く繁殖力が強い故に、いずれ増えすぎて抑制が利かなくなり、それが個人宅の庭だけでなく自然界にも侵出するのである。しかし庭造りは急いではいけないのであり、一年や二年くらいは草花が生えない状態を気長に我慢しなければならないと、今回の警告に関係した生態学者トレヴァー・リーナルズは言う。チェコの作家カレル・チャベックもまた名著『園芸家十二月』で、庭を造る者は十年後、五十年後を見据えて気長な作業を続けなければならないと言っている。

植物だけでなく動物の世界でも、例えば英国原産の赤リス(red squirrels)がアメリカ原産の灰色リス(grey squirrels)に淘汰されつつあるという憂慮すべき事態が生じている。ロンドンの中心部に近い公園でもリスの姿をよく見かけるが、あれはすべて灰色リスである。一方日本でも1970年代以降、アメリカ原産のブタクサとセイタカアワダチソウが元来の生態系を破壊しようとしている。前者は花粉症を引き起こし、後者は日本の伝統的な秋の風景を著しく損なう。

(安藤 聡)

アメリカ

英語の男女差における新たな局面

ことばの男女差は、フェミニズムの台頭に伴い、かれこれ30年以上前から性差別の温床と見なされ、PC (politically correct) 活動の重点課題として、特にアメリカ英語において、ニュートラルで性差を連想させない表現を社会内に流通させる原動力となってきました。たとえば、chairman => chairperson, chair; steward/ess => flight attendant; girls => women といったように。何が問題だったかといえ、"-man" で人間一般を代表させて女性を隷属的存在と見たり、性差と職業選択の固定化を助長したり、女性全般を未成年または性的な対象として連想させる視点にあったといえるでしょう。そのような言語的差別を正すべき立場にある言語学の教科書にさえ、そこで用いられる例文には「男性が主語で女性が目的語になりやすい」とか (Ben gave the book to Debbie.), 「女性を無能な人間とみなす例が多い」とか (She proved to be a disaster. [disaster = 最悪の人]), 「男性が (知的活動の代表である) 『読書をする』 ことの主語になりやすい」 (The boy read the paper.) といった傾向が指摘され、この問題の根の深さを感じさせます。このような性差別的なことば (sexist language) は日本でもひところ激しく糾弾されたものですが、「男ことば」「女ことば」が生活や文化における規範と深く結びついている日本では、欧米流のフェミニズムをそのまま取り入れることに対して異論も噴出しました。本稿では、英語の男女差をこのような政治的な側面から見るのではなく、近年明らかになった言語学的・生理学的な性差をご紹介します。

言語使用における男女差はさまざまな機会に指摘され、有名なところでは、言語学者のタネン (D. Tannen) のように、男性と女性がわかりあえないのはコミュニケーション規範を共有しない異なる「文化」に住むからだ、という提案などがありました。(もちろんこの意見にも異論は続出しま

した。) ひと頃男女差に触れることはタブー視していたメディアも、このところ、客観的・科学的手法を用いて明らかになった言語使用上の男女差を指摘し始めています。たとえば、BBC News (2000年11月28日) では、「男女間のいさかいを引き起こしたくはないが」とのアメリカの研究者の引用を紹介しながら、「男性は話を左脳でしか聞かないが、女性は左右の脳で聞く」という fMRI (functional magnetic resonance imaging) の結果を報告しています。確かに、左右の脳をつなぐ脳梁は、末端部が女性のほうが太くてより効率的に情報をやり取りするというのは生理学的事実です。数年前に『話を聞かない男、地図が読めない女』(Allan Pease, Barbara Pease 著) がベスト・セラーとなったのも、その原因を脳の機能の差に求めた点にあるのでしょうか (ただし彼ら自身がそのような研究したわけではありません。)

ところが最近、会話ほど男女差が現れないと思われる書きことばにおいても、明らかな男女差があることがわってきました (KR Washington Bureau 2003年5月23日)。イリノイ工科大学の Shlomo Argamon 博士によれば、統計的に見て女性は "with" や "for" といった関係性を重視する機能的語彙を用いる傾向があり、より相互交渉的なスタイルを好むことがわかったそうです。一方男性は、数字、形容詞、限定詞 (the, this, that など) を多用して具体的な情報を提示する傾向があるとといいます。Argamon 博士らは British National Corpus と呼ばれる膨大なテキスト資料から566冊の小説・記事などを選び、その200万語のデータから128に及ぶ統計的に有意差のある特徴を抽出しました。これらの特徴を用いると、80%の確率で著者の性別を判定できるとのことです。

たしかに、差異をことさら強調することは差別につながりかねません。しかし、同等の権利と自由をもって共存していくためには、個人間、コミュニティー間、地域間、民族間などに差異があることを認めることが、ステレオタイプ化と偏見の是正に向けた第一歩といえるでしょう。(片岡邦好)

フランス

オルレアン市の近況

愛知大学の提携校の一つオルレアン大学があるオルレアン市は、交通の要所であり、サントル地方の文化、政治、産業の中心地として栄えてきた。また、英仏百年戦争中1429年のジャンヌ・ダルクによるオルレアン解放などでも知られる歴史のある都市であると同時に、人口の30%近くを20歳未満の若者が占めるといふ若さを秘めた都市でもある。そのオルレアン市がもっとも力を入れている施策の一つに国際交流がある。現在、世界各地の14都市と姉妹都市提携をしているが、その中に宇都宮市が含まれている。今年（2004年）は宇都宮市との提携15周年目を迎えるとのことで、7月にはオルレアン市長をはじめとする使節団が宇都宮を訪問することになっている。また、現在、オルレアンからフランス人剣道家を宇都宮に派遣しており、来年は宇都宮からオルレアンに日本人剣道家を派遣することになっているそうである。

このような姉妹都市との交流のほか、国際フェスティバルの開催にも力を入れようとしている。フランスでの国際フェスティバルといえばカンヌの映画祭やアヴィニヨンの演劇祭などが有名であるが、オルレアン市の場合はそのような特定の分野のフェスティバルを毎年催すということではなく、年度ごとに分野あるいはテーマを設定するという方式をとっているらしい。今年はピアノ・フェスティバルが予定されており、来年は日本茶フェスティバルが予定されているということである。ちなみに、オルレアン市周辺には日立や資生堂など日本企業が進出していることもあって、日本との関係が深い地域である。

ところで、オルレアン市には路面電車が走っている。これは、1997年に採択された温室効果ガス削減のための京都議定書を受けて、1999年1月に着工、2000年11月20日に開通したものである。高加速、高減速、低騒音、超低床のいわゆるLRT (Light Rail Transit) で揺れもほとんどないか

ら、乗り心地は非常によく、水平飛行中の旅客機に乗っているような気分になることさえある。2両編成の車体の色はやや紫色がかった薄い茶色であるが、夜見るとライトグレーに見える。実は、この路面電車の車内にはフランスらしい仕掛けがしてある。自転車を持ち込んで乗った時に、車輪をはさんで自転車を固定するための矩形の金具が備えられているのである（表紙の写真を参照）。自転車王国の面目躍如といったところであろう。

(田川光照)

第9回 外国語コンテスト

英語部門

英語部門は従来の課題文暗唱から自由課題によるスピーチに変更したが、それでも例年とほぼ同数の13名の参加があった。内容は海外での経験から家族のこと、あるいは自分の夢など多義に亘るものであった。審査員は本学名誉教授の池稔氏と同教授のジョン・ハミルトン氏。上位入賞者は以下の通り。

- 第1位 02M3378 白鷺 “My Gratitude”
第2位 00M3405 木村 恵 “We All Are the SEED”
第3位 01J1094 皆川沙織 “Traveling”

第1位の白鷺さんは中国から日本に来て初めて経験したアルバイトのこと、その店主への感謝の気持ちを語った。第2位の木村恵さんは自作の絵本“The Seed”を原画を見せながら暗唱した。第3位の皆川沙織さんはヨーロッパ旅行中の偶然の出会いと、人と出会うことの大切さについて話した。学生は自分で英語の文章を書いてあらかじめ任意の英語担当教師に提出し、指導を受けた後にコンテストに挑んだ。全体的に英文はよく書けており、またそれぞれの主張がよく伝わる優れた内容のスピーチが多かった。上位3名のスピーチの本文を以下に掲載する。(安藤 聡)

ドイツ語部門

2003年度の名古屋語学教育研究室主催第9回外国語コンテスト・ドイツ語部門の本選が、2003年11月18日(火曜日)の午後4時40分より名古屋校舎中央教室棟203教室でおこなわれました。その結果を簡単にですが、報告したいと思います。

今回の課題は、ドイツ語の統一テキスト

„Lernziel Deutsch. Grundstufe 1.”から手紙文を選びました。内容はオーストリアのウィーンに行った留学生アトゥに友人であるレナーテが近況を報告したもので、手紙とはいえ話し言葉に近い文章で書かれていて内容は平易なものです。しかし例年ですと課題テキストは1年目で学習する内容から選ばれていたのに対して、今回は2年目で学習する内容であり、またコンテストの時期が早かったことから授業ではまだ扱っていない箇所からの出題となってしまいました。したがってすべての参加者にとってはまったく新たに触れる内容となりました。課題の難しさから参加者の数が大きく減少するのではと心配もしましたが、若干少なくなったものの、ほぼ例年通り7名の参加者がありました。

審査に当たっては、ネィティヴ・スピーカーである法学部客員助教授であるツォウベク先生に加わっていただき、より正確な審査ができました。審査方法は、ツォウベク先生と私(島田)の二人でおこない、表現力と発音・アクセントの合計点で審査を行いました。

すでに述べたように授業では扱うことのできなかったテキストにも拘らず、参加者は各自で熱心に練習に取り組んだ様子で、予想を遥かに超える結果となりました。基本となる発音・アクセントに関しては非常に完成度が高く、上位入賞者の間ではさらに高いレベルで表現力を競う争いになりました。非常に接戦となりましたが、結果は、第一位(優勝)石川雅英君(01J1142)、第二位島敬雄君(01J1399)、第三位木村恵さん(00M3405)となりました。第一位、第二位の石川君、島君はともに昨年度の入賞者で今回も安定した実力をかせてくれました。それから第三位の木村恵さんは大学の授業ではドイツ語を履修はせず独学でドイ

ツ語を学び、非常にきれいな発音を身に着けての堂々の入賞です。

参加者の数が他の言語に比べると少ないとの指摘もありますが、もともとのドイツ語の履修者自体が他の外国語に比べると決して多くはないので仕方のない点もあります。この点を何らかの形で工夫して、次回はより多くの参加者が集まるようにしたいと思います。しかし法学部・経営学部といった社会科学系の学部を中心とした愛知大学名古屋校舎で、これだけ熱心にそして上手にドイツ語を話せる学生がいるということは、ドイツ語の担当教員としてとてもうれしく思います。

意欲的な学生の皆さん、語学教育研究室にかかわっている多くの教職員のみなさんのおかげでこのような意義のあるコンテストを続けることができましたことに、心よりお礼申し上げます。最後になりましたが、審査員を引き受けていただいただけでなく学生の練習を熱心にしていただいたツオウバク先生に改めてお礼を申し上げます。

(島田 了)

フランス語部門

フランス語部門は、例年のごとく国際コミュニケーション学部のラッセン教授を審査員として招き、12月1日に本選を行なった。出場者は26名で、その内訳は1年生4人、2年生12人、3年生10人であった。

審査は予選と決戦の2回に分けて行なった。

予選では、課題テキストの "Le pont Mirabeau" (「ミラボー橋」) を全員に朗読してもらった。このテキストは20世紀初頭の詩人アポリネールの詩で、シャンソンとしても広く知られているものである。内容は平易であるが、一つ一つの音をきちんと発音することと、詩の情感を出すことがポイントになる。この予選を経て10人が決戦に進んだ。

決戦では、あらかじめ与えられていない、その場で初めて見るテキストを朗読してもらった。テキストには、かつて一世を風靡し日本語訳でも歌われたアダモのシャンソン "Tombe la neige"

(「雪が降る」) の歌詞を用いた。初めて見るテキストであるから、普段の学習で綴り字と発音の関係にどれだけ注意を払っているかが試されるわけである。例年に比べて多人数の参加者の中から決戦に進んだ10人であるだけに、ほぼ正確に読めた。その中でもとりわけ上位の人たちはミスがほとんどなく、ラッセン先生の採点表にも高得点が並び、近年にないハイレベルの大会となった。

誰が入賞してもおかしくはなかったが、結局以下の3名が入賞した。このうち白鷺 (パイ・ルー) さんは英語部門の優勝者でもある。また、残念ながら入賞は逃したものの、自ら参加した多くの皆さんの健闘、とりわけ1年生の時から連続3回出場の山田智紀君の健闘にも敬意を表しておきたい。

- 1位 02M3157 谷本 優
- 2位 02M3378 白 鷺
- 3位 02J1334 市川 友香

(田川光照)

中国語部門

第九回外国語コンテスト中国語部門は、2003年11月20日(木曜日)に209教室で行われました。「法学・経営部門」と「現中部門」に分かれ、参加者は合計39名でした。

「法学・経営部門」は課題文の朗読で、2年生以上の課題は「買鞋」(靴を買う)という内容の笑い話でした。簡単そうな文章でしたが、中国人独特の表現や笑い話の落ち所などが日本人には理解しがたいものがありました。例年と違い、課題文には日本語訳を付けませんでした。正しく発音できることが本コンテストのねらいだからです。しかし、ほとんどの出場者は準備するときに自分で一生懸命意味を調べたそうです。発表が始まる直前に汗をかきながら担当者を引き止めて、「先生、先生、この笑い話の落ちはどこですか。僕が一生懸命意味を調べたりしましたが、どうしても分かりません。」と言って来た男子学生のことごとくとも印象に残っています。また、発表の時、わざわざ作ったぬいぐるみを突然取り出し、会場の

笑いを誘った学生もいました。このような熱い雰囲気の中で、14名の出場者がベストを尽くしました。審査員の教員は選考にひどく頭を悩まされましたが、次のような審査結果を出しました。

- 1位 01M3430 壁谷 悦代
1位 00M3405 木村 恵
3位 02SJ1143 井上 和幸

「現中部門」は、課題部門と自由部門に分けられ、昨年より参加者がぐんと増え、25名もいました。課題部門では、「給大官理髪」（大官の散髪）というタイトルの笑い話の暗誦でした。意味的にはむずかしくありませんが、微妙な変化のある言いまわしが多く、暗記するには手間がかかるものでした。しかし、それぞれの発表には、出場者各々の「ぜったい賞をもらおうぞ!!」という熱い決意が感じられました。厳しく審査した結果、次の3名が入賞しました。

- 1位 03C8004 水野 尚子
2位 03C8024 西垣 泰史
3位 03C8006 西部 雄治

自由部門は自分で自由に発表文をつくり、自分自身が感じた或いは経験した中国の話を紹介しました。今年の参加者はレベルが高く、審査員も聴衆とともに楽しい時間を過ごすことができました。中には昨年に続き2年連続出場した学生がいましたが、その発音の目覚ましい進歩には感心させられました。厳しい審査の結果、次の2名が入賞しました。

- 1位 01C8152 寺西 貴子
2位 02C8193 太田 美帆

以上の二人は全国大会でもそれぞれの部門で第2位と第4位というすばらしい成績を収めました。

(中川裕三・鄭 高咏)

韓国・朝鮮語部門

本選は'03.11.20(木)午後1:30から開催。参加者、34名。今回も車道から1名の参加(03SJ1088 都築理乃)があった。

審査員は陶山信男名誉教授と常石の2名が担当。課題朗読文は1年・2年ともに教科書から選定された点もあって、例年以上に朗読がよく消化されていて、ハイレベルな闘いとなった。審査の結果、以下の3名が入賞。

- 1位 00J1369 水谷 元昭
2位 00M3405 木村 恵
3位 02J1372 小島 健志

入賞は逃したものの以下の諸君の健闘も併記したい。

白井大介(03J1173)、浅井宏美(02M3036)、加地優也(02M3424)、洪誠賑(02M3109)、坂井照央(02J1177)、安井久代志(03J1071)、水野誠(03J1071)。

(常石希望)

日本語部門

第9回外国語コンテスト「日本語部門」は、211教室に於いて、11月20日木曜日13時30分から2時間にわたって行われました。法学部、経営学部、現代中国学部の外国人留学生の1年生13名が、日本という異国での身近な出来事から学んだことについてスピーチしました。多種多様な角度からの日本、および、日本人発見は異国の人でなければ決して気づかない内容ばかりで、どれも興味深く、これまで学習した日本語を駆使して思いの丈を伝えようとする一人一人の学生の真摯な姿は、聞いている者の心に深く訴えるものでした。

この後に1位と2位の学生のスピーチを掲載します。読んでみてください。

- 1位 03M3431 許 愛霞 「手打ちそばから見た日本」
2位 03J1369 洪 博 「先輩のおみやげ」
3位 03M3425 金 今希 「異文化を超えて考えよう」

(山本雅子)



外国語コンテスト入賞作



英語部門

第1位 My Gratitude

白鷺

Good afternoon, ladies and gentlemen. I came from China when I was 13 years old. When I was a high school student, I did part-time job just as what you experienced. But there is just one difference; that is, I am foreigner and you are Japanese.

One day after school, I entered an ordinary chain restaurant named Kokoitchi in my neighborhoods, and asked the owner if he wanted a waitress. He was happy to hear my asking and let me enter the back room and asked me more details about myself. After the interview he told me there was no problem and he would call me next week to come to work. I was very happy because it would be my first work in my life. One week was going by, I didn't get any call, so I went to the restaurant and asked the owner if I could start working. Then he apologized me. He told me that he decided to use me, but some upper man said they would not use foreigners. He bowed to me, said sorry.

This made me realized that I am different, but I didn't give up finding part-time job. Next day I went all restaurants around my house and what I said first was that I am Chinese, and then I asked them if they need some waitress. But I wasn't accepted.

However, God didn't destroy my dream that someone will surely not distinguish Japanese and foreigner. It was on the way of coming home from school, I found a piece of Help Wanted paper been posted on a small noodle restaurant. I took the courage and knocked the door. The owner was an old man; he just looked at me and said "Uh, your height is enough to touch the shelf. Ok, see you 6 p.m. tomorrow." I was a little surprised but excited and ran to tell my mother that I really found my first job.

The old man was running the restaurant with his wife. They were a very cheerful couple;

especially the owner was always full of smiling. They were taking me as if I was their daughter. And noodle that I hated the most became the food I like the best. Even though after I quit the job, sometimes I went there to meet them and had a delicious dish. Every time they made me happy and gave me the courage to face any problems.

This March the owner passed away quietly. I couldn't believe that I would no longer see his smile and eat his dish telling him what happened to me. In his funeral I cried. I regretted that I had not said "Thank you." I was talking to him two things in my heart all the time during the funeral. One was "thank you" and "I am very appreciate working with you"; the other was "your noodle dish was the best in the world." I was afraid that he couldn't hear me, so I told him in my heart again and again. I regretted I didn't have courage to tell him that while he was here.

One always realizes the most important thing after he lost it. But today let's take courage to bless the people who are kind to you! Let' say, "Thank you very much." I am sure the difference in nationality or language doesn't matter when we express the feeling of gratitude.

第2位 We all are the SEED

木村 恵

It is my dream to be a picture book writer. While I was thinking and thinking about my life after graduation, one story had come out in my mind. This is the story. Please listen to it. (If you cannot see well, please come to a seat at the front /please come closer.)

"The Seed"

Where am I?

It's very dark here,

I can't see anything,

But somehow I feel very warm.

Oh, yes, I'm under the ground,

And I'm a Seed.
I wonder how long I slept.
Somehow I'm impatient,
Someone is calling me;
Someone is waiting for me.

Oh, yes, I'm going out into the world.
Hey, what is the world like?

I don't know why,
But I know only a little about the world.
First, I can see
Something beautifully blue.

And something shining brilliantly in it,

Ah, someone is calling me.
That is the one.
I don't know why, I want to see you so much.

However... I heard that the world is such a
terrible place.
The earthworm said,
There're no other places where you are so thirsty,
Where the wind is whistling,
Where you are stepped on,
And freezing...

Now I feel I'm protected,
I feel at ease being here under the ground.

But I'm going to go,
However hard it may be,
Surely...

Plenty of happiness and pleasure is waiting for
me.

Because that one shining on me,
So I'll go towards him
In that direction.

After I wrote this story, I thought what it
means to be protected, what going out into the
world is, and what it is to decide and go forward

by oneself. And I am thankful that I have for
being protected by so many people and society.

When children are growing up, they feel
excited and throbbing, and at the same time,
feeling uneasy. Whenever we make up our own
minds, and whenever we go to a different place,
we feel anxious about many things.

You too have sown some seeds. And you
know that not every seed comes up. I think this
is common to everybody.

Living aboveground is hard. Sometimes
because of many discomforts, we think we
would better off being protected under the
ground. But as long as we are there, the flowers
will not open and fruits will not be born. The
seed could sleep underground, remaining
secluded and seeing no one. However, although
the Seed knows the hard life aboveground, he is
determined to come into bud. It is because he
knows unconsciously that there is someone
waiting for him. It is because he knows that
surely there is a light that is shining on him.

We all are the sown seeds. We have put out
many buds, but we do have many seeds that
have not come into bud. All children, as well as
adults, are just some kind of small seeds.

Like this Seed, I would like to come into
bud. But someday, I would also like to be
someone who sows some seeds in other people's
hearts.

第3位 Traveling

皆川 沙織

I love traveling. Traveling sets me free
from my tedious daily life. Traveling gives me
hope. Traveling changes my life.

Last February, I went to Europe by myself.
In London I met a man who looked like a
Japanese when I was packing around 11:30 pm.
At that time, I stayed at an inexpensive
dormitory managed by a Korean, and I could
not differentiate Koreans from Japanese. The
man spoke to me in Japanese. He said, "If you
would like to take a bath first, please go ahead."
But I had to finish packing. I told him that he

could take a bath first.

After he took a shower, I saw him again by chance. He asked me, "Are you a student? What do you study at your university?" I answered, "I am an International Law student."

These words carried him back to his school days. He said, "Oh, I also studied International Law when I was an undergraduate. But my major was not law. I majored in Swedish at Osaka University of Foreign Studies." I said to myself, "Osaka, International Law, Foreign Studies..."

My law seminar students have joined "Seminar of International Law across Four Universities" every year since 1979. His university, Osaka University of Foreign Studies, is one of the universities that participate. I thought he might have attended this seminar when he was a student at Osaka University of Foreign Studies.

At the seminar, I met professors from his university. Thus, I thought that he might have met my professor, Professor Miyoshi, who also attends the seminar every year.

I asked him, "Do you know Professor Miyoshi at Aichi University?" He was very, very surprised. He said, "What? Yes, yes, I know him. Why do you know him?" I smiled and said, "I am a student at Aichi University, and I study under Professor Miyoshi." This was the start of many fantastic meetings.

Last summer I went to Europe again. I met a couple in Vienna. One week later I ran into them in Naples. In Paris I came across my high school classmate. In Munich I met an opera singer in a cafe, and discovered that her fiance graduated from the same junior high school as I.

People I met during the two trips to Europe had happy twinkles in their eyes and passion. Almost all of them were older than I, and had more experiences and knowledge. In talking with them, I learned many important things.

In my travels, I have met many special people. I have introduced only a few of them today. If I have a chance, I will be happy to talk

to you more.

Traveling gives me many fortuitous meetings. Meeting special people gives me questions, encouragement, and joy. Many meetings change my life. Traveling changes my life.

I love traveling. How about you?

日本語部門

第1位 「手打ちそば」の心

許 愛霞

日本に来てもう一年間半も経ちました。この間に、私は日本のことを自分の目で見たり、耳で聞いたり、心で感じたりして、沢山の新しいことが分かるようになりました。それと同時に、もともと知識として知っていることを実際に見て改めて考え直したりすることもありました。ここで、私がみんなに聞いてて頂きたいのは「手打ちそば」から見た「暖かい日本」のことです。

日本に来る前、「手打ちそば」は私にとってとても懐かしくて、暖かい思い出でした。思い出ですから、以前のことでよね。でも、それはそばが食べられなくなったわけではないです。思い出になったのは「手打ち」のことです。記憶の中で、まだ小学校一、二年生の頃、暑い夏に、扇風機の下でおばあさんの手打ちそばをよく食べました。太くて柔らかく、つつつでした。でも、町でそばを作る機械が現れてから、誰もおばあさんの手打ちそばを食べなくなりました。おばあさんの手打ちが遅いのも原因かもしれないし、おばあさんにこれ以上苦勞をさせたくないのも原因かもしれませんが、その頃から家で手打ちをする姿が見えなくなりました。もちろん、町の麺類のお店でも手打ちではなくて、すべて機械で作るようになりました。

でも、日本に来てからびっくりしました、町のあちこちで手打ちそばとか、手打ちうどんとか「手打ち」と書いた店がたくさん見えます。日本人はラーメンが大好きなことは以前から知っていましたが、まさか手打ちがすきだとは全然知りませんでした。えー、なに？確かにここは名古屋、日本の指折り数える大都市のひとつですよね。まさかこんな大都市で手打ちが存在するとは思いま

せんでした。もし、どこかの田舎で、おばあさんが時間をつぶすためとか、家族にひさしぶりの手打ちそばを作るというのはまだ理解できませんが、大都市の店でも手打ちをやるのはちょっと・・・仕事の効率が悪いのではないのでしょうか。不思議だな。来日するまで日本に対する想像、或いはイメージは、現代化がどんどん進んでいて、何でも効率向上を目指しているという感じでした。何でも手間をかけないようにしていると思っていました。実際日本に来て見ても、ほとんどそのとおりで、とても現代化された社会です。それなのに、全然現代化とは言えない手打ちの店は堂々と、ごく自然に各都市に存在しています。そして周りの風景に似合わないとか、無理に現代社会に存在している感じは全然しないです。実は、私は最初に、こんな伝統的な店は大丈夫かな、不景気の中で生き残れるかなと心配したこともありました。町で手打ちと書いたところを通るとすごく気になって、つい中をちょっと覗いて見て、お客さんがいるかどうかを確認してしまいます。結果はいつも私の心配は余計なことです。

では、どうして日本人は手打ちそばを好むのでしょうか。私は自分のことを考えてみました。どうして、おばあさんの手打ちそばがあんなに好きだったのかと。それはなんとと言ってもその暖かみです。長いのがあったり、短いのがあったりカタチは不格好でも、まるでおばあさんの体温が、心の温かさがそのまま伝わってくるようなあの暖かみが大好きでした。だから、日本人は、どんなに現代化されても、いくら機械が使われても、伝統を大事にし、そして、人と人の間に手から心に伝わってくる暖かさを忘れたくなくて、守りたいから、「手打ち」を好むのではないのでしょうか。手打ちの店もいきのこれるのではないのでしょうか。このことに気づいた時、急に私の留学生活がさびしくなりました。

第2位 先輩のおみやげ

洪 博

慣れ親しんだ、大好きな黄色い土の里を離れ異国に踏み込んで、もはや二年半

出国する前の私を思い出してみると、なんか不思議な気分です。あのころはわくわくどきどきの気分でした。

「洪 日本に行ってお金持ちになるぞ」「何言ってるんーすか」「ね 日本って経済大国だろう。テレビ番組を見たよ、何でもかんでもブランドの商品だってテレビやら冷蔵庫やら買わなくてもめっちゃくちゃ捨てるって。国に帰るときなんか捨ってきてくれよ」「お前アホかバカじゃないの」っその時によく友達と冗談を言い合いました。

その時の私は新たな世界、新しい留学生活に対して新鮮さと憧れを持つばかりでした。

そんな私でしたが、カルチャーショックは少なくありませんでした。

2001年4月11日福岡に到着してまず目を奪われたのは、高級自動車、立派な高層建築。日本の知恵、魅力、実力をたっぷり見せてもらいました。

「やっぱり経済大国ってすごいなあ〜」って感心していました。掛け布団しか持ってなく、心配でいっぱいだった私はしばらくして学校の寮に入り、ちょっとほっとしました。なぜならその寮は、テレビや冷蔵庫などの設備はパーフェクトと言っても過言ではなかったからでした。親に別れを告げ、ただ一人、留学に来た私でしたが、他人に頼ることは望みませんでした。

ある日 先輩の友達が家に来て「洪 何がほしい?」「え!」「何がほしいって」「そうだなあ〜ま 最近カメラを買おうかなあ〜と思って」「カメラ?よしゃ Let's go follow me」「ちょっとちょっと待って〜」こうして先輩に連れられてあるところに行きました。着いて、目の前に現れたのは山ほど積まれた電気ゴミでした。「わお〜」目の前の光景に、本当に驚きました。そして、その山をじっくり観察しました。しばらくして先輩はゴミの山から「ほら カメラ」「え!これってゴミ?新品みたいだなあ〜使えるの?」「当たり前じゃん、この辺のゴミは評判がいいんだよ」「まだ使えるのになぜ捨てるの?」「日本人はそんなもんだ。新しいので好きなやつがあったらすぐ古いやつを捨てるんだ」って先輩がこう言った時、「出て行け 外国のクソ餓鬼 二度と来るな」と言うどなり声がしました。先輩は私にカメラを渡してすぐ逃げましたが、あんまり遠くないところにいた、その声の主(ぬし)は私たちを追いかけてきました。それは、元気なおじいさんでした。

「まずい 管理人が来たぞ、早く逃げろ」。結局、そのときは、二人で必死に逃げ延びました。今でも、あの時の驚きと、おかしさは、忘れられません。

時間は流れ 早いもので あれからもう二年が経ちました。ですが、あのカメラ あの日本に来て初めて持ったカメラは、今でもずっと大切に大切に保管しています。(道具のカメラを出す)これは思いでというより証拠です。これは経済大国、電気大国、お金持ちと呼ばれる日本では、人間以外の生活用品をまだ使えるのに新品のままでゴミとして捨てられているという証拠です。電気製品はおろか、食糧さえなく苦しんでいる国の人々の苦痛を知らずにほしいままにして好きな物さえ手に入れればよしとする日本人は科学成分が含まれるゴミを捨てたあげくに環境破壊をしてしまうばかりではなく、それは自然循環により人間の口に入ってしまう、これは一種の罪ではないでしょうか。

若い皆さん 真剣に考えてください。我々の共存している地球のこと。会ったことのない遠い国の貧しい人たちの暮らし。このままの状態を続けて本当に良いのでしょうか？中国も現在急速に経済発展しているといわれていますが、本当に豊かになるというのはどういうことなのでしょうか。今、私はみんなの手で貧富の差がない新しい世界、美しい地球を作れますよう、ここから祈っています。自分にできることを考えなければならぬと思っています。

ご静聴ありがとうございました。

公開講座「言語」2004 プログラム 後期

愛知大学言語学談話会主催・
愛知大学語学教育研究室共催

場所：愛知大学車道校舎 461-8641 名古屋市東区筒井 2-10-31 TEL: 052-937-8111 (地下鉄桜通線「車道」下車, 1番出口より徒歩1分)

時間：14:30～16:30

聴講無料

2004年

(6) 9月18日 (土)

「手から口へ M. コーパリスの言語起源論を中心に」
伊藤 忠夫 (中京大学教養部教授)

(7) 10月2日 (土)

「記号と意味 形式科学の視点から」
河田 賢二 (愛知大学経営学部助教授)

(8) 11月6日 (土)

「初級・中級のための発信型学習英和辞典とコーパス」
塚本 倫久 (愛知大学国際コミュニケーション学部助教授)

(9) 12月4日 (土) (2 講義開講)

「アメリカ人が経験する日本と日本語」
塚本 鋭司 (愛知大学国際コミュニケーション学部助教授)

「英語のなかの日本語」

早川 勇 (愛知大学経済学部教授)

2005年

(10) 1月8日 (土) (2 講義開講)

「韓国の現代作家李外秀の小説における表現について」
田川 光照 (愛知大学経営学部教授)

「なぜ韓国のキリスト教は成功したのか」

常石 希望 (愛知大学法学部教授)

編集後記

『語研ニュース』第11号は外国語コンテスト英語部門の入賞作品を掲載したため、いつもより頁数が多くなった。今回のコンテストでは複数部門で上位入賞を果たす学生が目立ち、白鷺さんは英語とフランス語の二部門で、木村恵さんは英語、ドイツ語、中国語、韓国・朝鮮語の四部門でそれぞれ入賞している。

昨今の今頃の『語研ニュース』の編集後記にも書いたことを、重要なのでもう一度くり返す。夏休みに入ると、約2カ月の間、外国語から遠ざかった生活をする学生が多い。せっかくここまで習得した語学力を低下させるのは勿体ないので、せめてインプット(リーディングとリスニング)はなるべく毎日続けよう。語学は学力や才能ではなく、単に持続力である。

S.A.